

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月31日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22510263

研究課題名（和文） HIV/AIDS問題に対処するローカルな公共性の構築に関する研究

研究課題名（英文） Research on formation of local publics to cope with HIV/AIDS issues

研究代表者

西 真如 (NISHI MAKOTO)

京都大学・グローバル生存学大学院連携ユニット・准教授

研究者番号：10444473

研究成果の概要（和文）：エチオピアの農村部において、HIV 不一致カップル（一方が HIV に感染しており、他方が感染していないカップル）に関する調査および、HIV の影響を受けた世帯の生計を支えるための地域住民の取り組みについての調査を行った。また地域で活動する保健指導員の HIV 感染症への取り組みについても調査した。これらの調査結果に基づき、HIV に感染した者と感染していない者とが、互いの健康に配慮しながら共存するための技術的・制度的・倫理的な条件について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Field researches were conducted in rural Ethiopia to collect evidences concerning HIV discordant couples and on the activities of local people to support households affected by the virus. Interviews with local health workers were also conducted to learn their activities to mitigate the impact of HIV infectious diseases. Considerations were made to figure out the technological, institutional and ethical conditions of a society in which those with HIV and those without HIV can maintain affirmative relationships based on mutual care for each other's health.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：HIV 感染症、公共性、アフリカ

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、効果的な HIV 治療が確立されたことによって、HIV 陽性者の余命を飛躍的に延長することが可能となった。いわゆる低所得国の人びとは当初、費用の問題から HIV 治療を受けることが困難であったが、しかし陽性者の権利擁護を求めるグローバルな運動の結果、2005年頃からは、サハラ以

南アフリカ諸国などで生活する人びとの治療アクセスが飛躍的に改善されつつある。HIV/AIDS が「死の病」ではなくなったことで、HIV に感染した者と感染していない者とが、地域社会においていかに共存するかということが重要な課題となった。

地域社会において HIV に感染した者は、健康への脅威として排除される場合がある

一方で、感染していない者との間に親密な関係を築いて生活している例も少なくない。例えばアフリカ諸国では、多数の HIV 不一致カップル（一方が HIV に感染しており、他方が感染していないカップル）が生活していることが知られている。またアフリカの農村においては、HIV の影響を受けた世帯の生計を地域住民が支えている事例が報告されている。

研究代表者は研究開始当初までの調査で、エチオピアのグラゲ県において、HIV/AIDS のリスクに対処するための地域住民の取り組みに関する調査を行い、次のような認識を得た。治療アクセスの改善によって、HIV 陽性者は確かに、余命の飛躍的な延長という恩恵に与ることができる。しかし彼らが、他の者の健康を脅かす脅威としてではなく、地域社会の一員として生活してゆくためには、ウイルスに感染した者とそうでない者とが、互いの健康に配慮しつつ親密な関係を構築し、維持してゆくことが重要である。

2. 研究の目的

上述の認識にもとづき、本研究ではエチオピアのグラゲ県で生活する人びとの HIV 問題への取り組みに関するフィールド調査にもとづき、HIV に感染した者と感染していない者とが、互いの健康に配慮しながら共存することを可能にするような、ローカルな公共性の構築について検討した。

とりわけグラゲ県における生産（食糧生産）および再生産（結婚、出産、育児）の活動に焦点をあて、これらの活動において、感染した者と感染していない者がどのように関わり合っているか、フィールド調査にもとづく考察を行った。

3. 研究の方法

エチオピアおよびウガンダにおいて、合計 9 週間のフィールド調査を実施した。フィールド調査においては、HIV に感染した者を含む現地住民からの聞き取りの他、現地政府の保健局等において資料収集も行った。またアジスアベバ大学社会学部を訪問し、エチオピア農村の地域医療に関する意見交換を行った。ウガンダでは、首都カンパラにおいてマケレレ大学社会学部および同社会科学研究所を訪問し、HIV 陽性者に対する地域住民のサポートについて意見交換すると共に、資料収集を行った。

なおフィールド調査の実施にあたっては、現地の陽性者団体や政府の保健当局等の協力を得て、HIV 陽性者への適切な配慮の下に調査を行った。

4. 研究成果

(1) 各年度の研究実績

① 2010 年度

エチオピアの南部州グラゲ県において、2010 年 7 月 29 日から 8 月 25 日まで HIV/AIDS 問題に関する現地調査を実施した。グラゲ県エナモル・エナル郡保健局および同郡内の保健所を訪問し、HIV 検査および治療の実施状況について資料収集を行うと共に、地域の HIV 陽性者への支援について聞き取り調査を行った。また同郡およびグラゲ県ウォルキテ市において、HIV/AIDS の影響を受けた世帯を訪問し、聞き取り調査を行った。

② 2011 年度

エチオピアおよびウガンダにおいて、2011 年 12 月 21 日から 2012 年 1 月 11 日までの期間、HIV 感染症問題に関する現地調査を実施した。エチオピアでは、南部州グラゲ県において昨年度に引き続き、HIV 不一致カップル（一方が HIV に感染しており、他方が感染していないカップル）に関する聞き取りおよび、HIV の影響を受けた世帯の生計を支えるための地域住民の取り組みについて聞き取り調査を行った。また首都アジスアベバにおいてアジスアベバ大学社会学部 G. インティソ教授を訪問し、エチオピア農村の地域医療に関する意見交換を行った。またウガンダでは、首都カンパラにおいてマケレレ大学社会学部 E. キルミラ教授および同社会科学研究所 M. マムダニ教授を訪問し、HIV 陽性者に対する地域住民のサポートについて意見交換すると共に、資料収集を行った。

また HIV/AIDS 問題に関する公開シンポジウムを 2011 年 6 月 5 日に開催しアフリカの HIV 問題について意見交換を行った。本シンポジウムは社団法人京都府国際センターおよび特定非営利活動法人アフリカ日本協議会との共催で実施し、アフリカで HIV 問題に関わる NPO 関係者、研究者、学生、市民等が参加して活発な討論を行った。

③ 2012 年度

エチオピアにおいて、2012 年 8 月 5 日から 17 日までの期間、HIV 感染症問題に関する現地調査を実施した。昨年度に引き続き、南部州グラゲ県において HIV 不一致カップル（一方が HIV に感染しており、他方が感染していないカップル）に関する調査および、HIV の影響を受けた世帯の生計を支えるための地域住民の取り組みについて調査を行った。

本年度の調査においては、HIV で夫を失い、自らも陽性者である女性の生計や再婚、出産といった問題に、特に焦点をあてた聞き取りを行った。

(2) 主な成果

① 結婚、出産、育児のような、地域社会の再生産 (reproduction) に関わる問題におい

て、感染した者と感染していない者とがどのような関係を結びうるか、複数の HIV 不一致カップルへのインタビューを中心とした調査によって明らかにした。グラゲ社会の結婚および家族に関わる諸制度の下で、こうしたカップルが持続的な関係を結び、地域住民の関与のもとで社会の再生産に参加しうる条件について考察した。

グラゲ社会で生活する不一致カップルの中には、健康上および道徳上のジレンマを解決できず、関係の暴力的な破綻に至るケースもあった。他方で感染の脅威を抱えながらも、互いの健康に配慮しつつ生活を共にし、出産や育児に取り組んでいるカップルもあった。またグラゲの地域住民の中には、HIV 陽性である女性の出産を肯定的に受け止める例もあった。さらに地域で活動するヘルスワーカーは、母子感染を予防するための知識を積極的に提供することにより、HIV 陽性である女性の出産と育児を支える役割を果たしていた。

② HIV の影響を受けた世帯の生計を維持するための地域社会の取り組みについて、食糧生産の問題に焦点をあてて分析した。グラゲの農村においては、エンセーテと呼ばれる多年生植物の栽培を中心とした農耕が営まれている。エンセーテはグラゲ農民にとって主要な栄養源である。しかし HIV の影響を受けた世帯（主要な働き手が AIDS により死亡したか、あるいは HIV 感染により健康状態が悪化しているような世帯）においては、エンセーテの栽培に必要な労働力が確保できず、世帯全体の栄養状態が悪化するケースがあった。

この問題に対処するため、グラゲ農村では HIV の影響を受けた世帯に対して、在来の共同労働組織が無償で労働を提供する取り組みが始まっている。本研究では、エンセーテ栽培の労働過程と、それに伴う共同労働組織の活動を観察し記述することを通して、地域社会における生産と労働という視点から、地域住民の HIV 問題への関与について考察した。

地域社会で生活する HIV 陽性の女性は、性交渉においてはほかの地域住民に対して、また出産においては子に対して疫学的なリスクとなり得るため、地域社会から孤立しやすい。しかし本調査においては、グラゲ県において、HIV 陽性者である女性の世帯が持続的な生計を営むことができるよう、地域住民が食料生産に必要な労働力を提供している事例があることが明らかになった。また地域で活動するヘルスワーカーのなかには、陽性者の結婚や出産に必要な知識を積極的に提供する者もいることが明らかになった。これらの事例は、HIV に感染した者と感染していない者とが、地域社会において共存するための

倫理的な関係について考察する上で重要な意義がある。

③本研究における成果の特徴

本研究は、HIV 不一致カップルあるいは HIV の影響を受けた世帯の生計を支えるために、ローカルな社会関係が果たす役割に着目したものである。本研究は、HIV に感染した者と感染していない者とが、地域社会のレベルで親密な関係を結び、共存する可能性を追求したものであり、その意味では、HIV 陽性者の治療へのアクセスや陽性者どうしの連帯といった問題に着目して HIV 陽性者のエンパワメントを論じる研究とは、異なる視点に立ったものである。ただし本研究は、HIV 陽性者への治療サービスの提供や、陽性者によるグローバルな連帯の重要性を否定する立場をとるものではなく、むしろグローバルな制度や運動と、ローカルな活動との接合によって、HIV に感染した者と感染していない者の双方が、より豊かで価値のある生活を実現しうるという理解に拠るものである。

HIV 問題をあつかった公衆衛生上の研究は、陽性者を感染リスクとみなすことが多く、他方で医療人類学/医療社会学的な研究は、陽性者どうしの結びつきや治療へのアクセスについて論じることが多かった。これに対して本研究の成果は、HIV 不一致カップルや HIV の影響を受けた世帯の生計維持という視点から、ウイルスに感染した者と感染していない者とが共存するための技術的・制度的・倫理的な条件について考察したもので、医療人類学および公衆衛生の双方に新たな視点を提供するものである。

本研究に近い問題意識を持つ議論として、多文化共生社会すなわち、異なる文化的背景を持った住民が、それぞれのアイデンティティに閉じこもるのではなく、互いに関与しながら共存する地域社会を構築する取り組みに関する議論を挙げることができる。ただし本研究は、文化的な相違というよりも健康状態の不一致（ウイルスに感染した者と感染していない者）を前提とした共存を問題としている点で、ローカルな公共性の形成に関する議論に、新たな視点を提供するものである。

本研究の知見は、研究者、政府職員、NGO 関係者等が、地域社会のレベルで健康状態の異なる人びとの共存を促し、あるいは HIV/AIDS をはじめとする感染症の影響を受けた人びとの生計を支援するプログラムを立案するにあたって、有効なインプットとなるものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計 4 件)

- ① Nishi Makoto, Reconsidering the Moral Domain in the Era of Global Health: Knowledge, Institutions, and Ethical Issues of HIV Interventions. Proceedings of the Fifth International Conference of Kyoto University Global COE Program, 査読無, 2012, pp. 107-127.
- ② Nishi Makoto, Information Sharing, Local Knowledge, and Development Practices: The Experience of Community-based HIV/AIDS Initiatives among the Gurage, Southern Ethiopia, Nilo-Ethiopian Studies, 査読有, No. 15, 2011, pp. 1-10.
[http://www.janestudies.org/drupal-jp/sites/default/files/NES_no15\(2011\)_Nishi.pdf](http://www.janestudies.org/drupal-jp/sites/default/files/NES_no15(2011)_Nishi.pdf)
- ③ 西真如、疫学的な他者と生きる身体—エチオピアのグラゲ社会における HIV/AIDS の経験、文化人類学、査読有、76 巻 3 号、2011、pp. 267-287.
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008897503>
- ④ 西真如、ケアの政治学—アジア・アフリカ地域社会の視座、Kyoto Working Paper on Area Studies 119、京都大学東南アジア研究所、査読無、2011、30 p.
<http://hdl.handle.net/2433/155725>

〔学会発表〕 (計 6 件)

- ① Nishi Makoto, Risk and Responsibility in the Era of Global Health: Public Health Interventions and Local Responses among the Gurage, 18th International Conference of Ethiopian Studies, 30 October-3 November 2012, Dire Dawa University, Ethiopia.
- ② 西真如・姜明江、服薬アドヒアランスに関する医療人類学的考察—アフリカから学ぶ、感染症治療に服薬者の社会関係が果たす役割、第 53 回日本社会医学学会総会、2012 年 7 月 14-16 日、関西大学。
- ③ Nishi Makoto, Life and Suffering in the Era of Global Health: Women with HIV in Rural Ethiopia, Translational Movements: Ethnographic Engagements with Technocultural Practices, 4 March 2012, Osaka University.
- ④ 西真如・戸田美佳子、アフリカ社会における生存・ケア・レジリエンス、日本人

間の安全保障学会創立大会、2011 年 9 月 17 日、同志社大学。

- ⑤ Nishi Makoto, Fight AIDS, Not People with AIDS: Public Health Interventions and HIV-Discordant Couples in Rural Ethiopia, JSPS Conference on Contextualizing Post-reconciliation Violence: Globalization, Politics and Identities in Africa, 20 January 2011, Embassy of Japan, Nairobi.
- ⑥ 西真如、ウイルスと検査キット—エチオピアの農村で HIV とともに生きる人びとの経験、日本文化人類学会第 44 回研究大会、2010 年 6 月 12-13 日、立教大学。

〔図書〕 (計 2 件)

- ① 速水洋子・西真如・木村周平編、京都大学学術出版会、講座生存基盤論 3 人間圏の再構築—熱帯社会の潜在力、2012、396p.
- ② 西真如 他、京都大学学術出版会、講座生存基盤論 5 生存基盤指数、2012、pp. 193-225.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西 真如 (NISHI MAKOTO)

京都大学・グローバル生存学大学院連携ユニット・准教授

研究者番号：10444473